

小學作法一班

佐久間舜一郎  
進藤貞範

編輯  
五

佐々間舜一郎 編輯  
進 藤 貞 範

# 小學位法一班

岡山縣師範學校感版

## 小學作法一班卷之五

### 第一章

#### 進膳及撤膳の作法

膳を出さぬを。左の手なう不て膳の中  
間をより少く前めの方を持ち。拇ゆび指を  
椽へりけ。他の四し指ををぎ。下へ廻り  
て。確と持ち固め。右の手は。右の椽  
へ軽くりくべし

捧げ方不。上下の二様あり  
上ハ。貴人ハ進むる持ち方なり。我  
乳の邊りより上ハ捧げて。少く

貴人ハ出さず膳の持ち方



前ハ差し出し。  
口氣の膳部ハ  
及くろざる様ハな  
し。膳の下より  
三尺程も先き

を見る心得不

持つべし

下ハ。中輦以下

ハ出さず持ち方

なり。我乳の通

りハ捧げ。稍前ハ差出し。て持つべ

膳を進むる不也。一座中ハ上座

中輦以上ハ出さず膳の持ち方

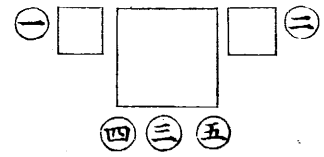


の客より順次不出てべし  
同等の貴人一坐不相並びたる時  
不出。給仕の者二人出て等しく出  
てを礼と云  
膳の据ゑ方ハ。先づ左の膝をつき。  
右の膝をつきさまふ。膳を下ふ置  
き。膳の向ふを少しく客の左の方  
へ寄せて据ゑ。手を放たぬ。其儘不

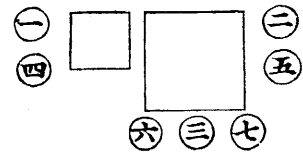
已が體を後へ引きて。其膳を四五  
分許りも徐り不出し進めて立つ  
べし。客の膝へさし附くるハ不敬  
なり。餘り遠きも亦よからぬ。其可  
き程を見定めて置くこと肝要な  
り

三汁五菜。二汁七菜膳などハ。先づ  
本膳を出して。次は二の膳。三の膳

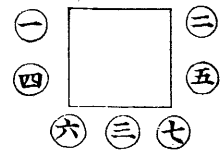
三汁五菜膳の圖



二汁七菜膳の圖



本膳七菜膳の圖



と。順次不出きべし  
 二の膳ハ客の右不出。三の膳ハ客の  
 左不出きべし

凡て。給仕する間ハ。清潔なる疊紙  
 を懐中せべし  
 膳部を撤する不む。三の膳。二の膳。  
 本膳と。後ち不出したる膳より先  
 き不出きべし  
 此の時も。上座の客より順次不撤  
 るを礼とせ  
 給仕多人數なる時ハ。各少一づ

間を開きて。互ひ違ひ小進退をべし。必だ雜沓をべからば

### 第二章

#### 執酌の作法

先づ盃を臺と共小持ち出で。其坐の貴人の方へ寄せて据ゑ置き。次小銚子を持ち出で、盃の側小跪づき。左小盃臺を持ち。右小銚子を

執りて。三足許り後ろへ退き。跪きて待ち居るべし

客挨拶ありて。盃を始むべき人定りたる時。其人の側小進みて。酌を執るべし

又。席小因りて。膳部小各盃の時ならば。直小銚子を持ち出で。前の如き場合を見合せて。酌を執るべし

酌を執るふや左の膝をつき。右の膝を少しく立て、酒を酌ながら。右の膝をも共ふつくべし。鉞子と折り目の所を詰めて持つべし。大なる鉞子ならぬ。右の手をつま隠しの所へつめ。左の手は折り目の上を持つべし。間鍋ならば。右の手を弦の上より

鉞子持の方



ハ拇指を蓋の上へ軽くうけ。残り指を底へ添へて酌ぐべし。徳利ハ。右の手へ細き所を持ち。左

うけ。小指と四三の指ふて確と持ち。拇指と食指をバ寛く爪先を合せて持ち。左の手

の手ハ膨ふくらミの所  
へ卒と添へて酌  
ぐべー  
盃をさしたる人  
と。受けて飲む人  
との間ハ酌を執  
る者の瘞りて居  
ることハ古礼不

酌を執る圖



元もとを隔つと云ひて。深く戒めたる  
事不て。執酌者第一の失礼なり。必  
ず右ハ左へ添ひて居る心得ある  
べー

### 第三章

人より響應を受る時の作法  
人ハ招りれて。響應の席ハ出たる  
時ハ。坐作進退の間。務めて礼儀ハ



從ひ。苟なり不も驕  
傲不遜の体容  
あるべりらば  
著席する以前  
必だ主人不挨拶  
せむべし  
席不著く不ハ。  
當坐の客を見

著席遜讓の圖



合せて。遜讓を旨とし。已より少し  
不ても長者と見做さば。已其下席  
し就くべし  
主人の配意ありて。坐次の定めあ  
らざ。強て辞退せむべりらば  
同輩の間ふて。已も一上坐不就く  
不至らば。下坐の人不挨拶して坐  
せむべし

坐次の定めありて。尚彼是と辞退  
をなす。著坐の時間を費す。却て  
當坐の失礼なり

既坐小著きて。顔色を和らげ。  
心を穩り。小持つこと肝要なり  
坐する小。常の如く体を正しく  
なす。兩手を膝の上小置くべし。用  
なき小手を動かし。指を鳴らすな

ど。坐べりらば

袴の裾を。左右小廣く開くべり  
らば

袴の折條ひだを直し。襟筋の繕ひなど  
坐べりらば。体裁目苦しくして。且  
つ失礼なり

茶を受る小。臺と共小取り。臺を  
下小置き。茶碗むり取り取舉げて

飲むべし。通ひの者若し此礼を知  
らば。て。臺を放たざる事あらざ。  
強て臺を取らふ及むべし。時宜し依  
るべし。

第四章

膳部を受る作法

膳し向ふふし。真向ひて坐すべし  
らば。必し少し隅うけて居る心得

あるべし

膳を据る人ハ。古礼し據れハ。多く  
其家の主人也。又ハ其子息親戚也。  
時ふよりて之。高貴の人モ親ら据  
えらる、事あるべし。是れ客を尊  
敬する饗礼第一の作法なれどな  
り

貴人の親ら据えらる、時ふハ。膳

膳を受る時の圖



を下不置るゝ  
を待たぬ。此方  
より両手を出  
して。恭しく請  
取り。下不置き  
ながら両手を  
つきて礼を述  
ぶべし

又。其家の召使ひ不ても。並人ふあ  
らざれど。膳を据ゑたる時。両手を  
つきて挨拶をべし。常並の通ひな  
らば。其儀不及むざる事なり

第五章

客席飲食の作法

飲食するの始。先づ右の手不て  
飯椀の蓋を取り。左の手へ移し。膳

の左りの方に置き。汁椀の蓋を取  
る事も同一作法になり。次に箸を  
取り。其手で飯椀を取り舉げ。左  
の手に移し。二箸飯を食して下に  
置き。又右の手で汁椀を取り舉  
げ。之も左へ移し。箸を添へて汁を  
りりを吸ひ。右の手で取り直して  
下に置き。又右の如くに飯汁を飲

食し。汁の實を食し。其次に膳に附  
きたる菜を食さべし。  
始めより三回まで。右の手で取  
り。左へ移して飲食し。又右の手で  
下に置くべし。其後は左に取  
り。又左に下に置くを宜とし。  
膳脇左右の菜は。右に在るは右の  
手で取り舉げ。左へ移して食し。

後右へ取りて元の所へ置き。左へ  
在るを。總て左の手へて舉げ置き  
てべー  
膳へ在る菜を。何へても取り舉げ  
て食てべりらば。若し汁物ならば。  
汁椀の上へて食てべー  
貴人の前へて。箸を短く持つを  
礼とて。

飯中へ盃の出たる時へ。箸を飯椀  
と汁椀との間へ。筋違ひへ膳の縁  
へうけて置くべー。飲食し畢らば。  
初の如く横へ置くべきなり  
本膳を食して。次へ二二三の膳を食  
てべー  
二の膳の菜小汁へ。箸を取り直し。  
右の手へ取り。左の手へ移して食

たべー

三の膳の菜小汁ハ。左の手不取り  
て。食たるものと知るべー

汁ハ本汁を換へたる後。二の汁を  
食たべー。二の汁なき時。汁を換へ  
たる間ハ。飯を食たべりらば

### 第六章

食事不當り慎むべき十四條

### の事

第一箸なまり 是れをや食し。彼  
れをや食えんと。彼是を見廻た  
事

第二移り箸 膳部不附きたる。羹  
物菜類などを。總て一種づ、食  
たべきものなる。不。既不是物を  
食して。直不又彼物不移る事

第三握りて箸 箸小附きたる飯

粒を去るとふ。とも箸を用ふる事

第四もぎ喰ひ 箸小附きたる飯

粒を口ふて取る事

第五舐り箸 箸を深く舐る事

第六こみ箸 口中へ箸ふて押し

入るゝ事

第七こぢ箸 煮物汁の實など。下

不在る物をこぢ起して食ふ事

第八探り箸 尚何り下不在りや

と探り見る事

第九廻し箸 香の物ふて湯茶の

中を掻き廻す事

第十空箸そらづ 食はんとして箸を附

けながら食はせしめて止む事

第十一受け吸ひ 汁の再進を通



ひの者より受け取りて。膳不置  
りむ直不吸不事

第十二復盛 飯を箸不て椀の中  
へ押し固めて食ふ事

第十三膳越し 膳の向ひ不在る  
物を。手不取り舉げむして。箸不  
て直不食不事

第十四犬喰ひ 俯むきて何の挨拶

挨拶をも為さば。食ひ入りて居る  
事

右の十四條々。礼法不て深く忌嫌  
たる事なり。人の子弟たる者。食事  
不當り。常不慎きて苟不も忘るべ  
りらば

小學作法一班卷之五 畢止

明治十七年一月十日版推免許  
全 年三月出版

著者 岡山縣平民 佐久間舜一郎

全縣士族 備前國岡山區西川  
九十九番屋敷居住

著者 進藤貞範

全國全區門田屋敷  
三十三番屋敷居住

出版者 岡山縣師範學校藏版

製叢 西尾活版所

本兌 渡邊祐吉

各國專賣所 柳原喜兵衛

東京	山中市兵衛	九屋善七	石川治兵衛	稻田佐兵衛	前川善兵衛	花原卯助	梅原龜七	前川源七郎	松村九兵衛	三木佐助	岡金真七	藤井孫兵衛	佐木惣四郎	田中治兵衛
大阪	姫路	福山	尾道	廣島	山口	萩	下關	松木	福岡	長崎	熊本	高松	德島	
全	山野長兵衛	整理社	三木善兵衛	松村善助	荒木豐次郎	宮川臣吉	松原喜兵衛	立野榮次	生田新助	林田新助	熊本吉藏	長島吉藏	岡田為助	黑崎精二